

視覚障害者とミュージアムアクセス

解説の試みをとおして

前田 真之

(沖縄県立博物館)

People with vision problem and museum access

Masayuki MAEDA

(Okinawa Prefectural Museum)

はじめに

近年 博物館においては、すべての人に利用していただきため、来館者の多様なニーズにきめ細やかに対応できるあり方が論議されるようになってきた。

とりわけ障害者への対応については、それぞれの館でどのような形で実現が可能であるのか、この課題の検討が差し迫ったものとなってきている。この課題については、それぞれの館の実状に即しながら可能な方向を探っていくことが必要であることは言うまでもないが、その手がかりとしてアメリカの70年代以降の状況などを参考にすることも必要である。

アメリカにおいては、障害者対応に関連して1973年にリハビリテーション法(Rehabilitation Act)が制定されている。そこでは、全ての人がプログラムの恩典を享受できるよう平等な機会提供を行うこと^(注1)の重要性が指摘され、そのために施設構造やプログラム活動を通してアクセスが配慮されなければならない^(注2)と定めている。同法504条では「ハンディキャップを有するアメリカの人々は、ハンディキャップを有するという理由のみにより、参加を排除されたり便宜を拒絶されたりしてはならないし、また連邦からの財政的支援を受ける活動やプログラムのもとでは差別を甘受する必要もない」^(注3)と定め、障害者を特別視するのではなく、全ての人に平等な機会提供を行うという考えが貫かれている。しかし同法にはアクセスを保障するための具体的な規定は見られず、その後の法律の制定を待つことになる。

1988年の公民権法(Civil Rights Restoration Act)^(注4)でも「いかなる施設のプログラムも、連邦の支援を受ける場合は、そのプログラムに全ての人が接近可能でなければならぬ」と規定されたが、その後1990年に制定された障害者法(Americans with Disability Act: 通称はADA法)^(注5)が、物的な面のみならず人的な面に於いて、全ての人が公共施設を利用できるよう具体的な内容を盛り込むようになった。そこでもリハビリテーション法と共に

する考え、すなわち障害者だけを特別に扱うというのではなく、“全ての人に平等な機会を提供する”という考えが貫かれていることは言うまでもない。しかしその社会的な背景としては、ベトナム戦争後に問われたアメリカの博物館のあり方があることには気をつける必要がある。^(注6)

一方、日本の博物館における障害者対応はどのような状況にあるのだろうか。

日本に於いては、東京にあるトムギャラリーが視覚障害者を対象とする展示企画に意欲的に取り組んできたが、そのほかにも名古屋市美術館が1989年と1992年に「手で見る」展覧会を企画^(注7)、さらに1994年にも「心で見る美術展 私を感じて」を開催している。また1996年には東京大学でパネルディスカッション「視覚障害者のミュージアムアクセス」が開催され、さらに1998年3月にも、神奈川県立博物館でシンポジウム「ユニバーサル・ミュージアムをめざして—視覚障害者と博物館—」が開催されている。これらの展示やシンポジウムは、それまで障害者への対応が不十分にしか取り組まれてこなかった状況を前提にするならば、大きな意義を有することは言うまでもない。しかしその試行錯誤的な試みの中には、これから改善を必要とする点も幾つか出てきている。

名古屋市美術館が「心で見る美術展」において視覚障害者のために用意した解説テープを、琉球大学及び沖縄国際大学の「博物館経営論」の授業の中で学生に聞かせ、それをとおして“学生がどれだけイメージ化できるのか”作業を行わせたところ、解説の内容の情報過多、説明対象に関する全体と部分との相互関係の不十分さから、解説の対象がどのようなものであるのかイメージ化するのが困難であった。障害者に対する意欲的な取り組みという点では評価できるが、解説の内容はイメージ化できるまでには十分なものとはなっていない。その原因は、ジュリア・カセムの言葉によるならば「作品を見ることができない人が、頭の中ではっきりしたイメージを作れるよう、描写をする上で不可欠な要素は何か」^(注8) ということが十分配慮されず、過剰な情報が提供されているためである。

また神奈川県立生命の星地球博物館でのシンポジウムでは、主として自然系の博物館における障害者対応が話され、そこでは骨格標本等の裸展示や体験のできる展示の取り組みが紹介された。しかし古文書などを扱う歴史などの人文社会科学分野での障害者対応については、参加者の関係で十分な論議が行われなかった。

全ての博物館資料が触れるものではないことを前提にするならば解説の持つ役割には無視できないものがあり、今後とも実践を深めていく中で、解説の質を問うことがますます必要になってくると思われる。1997年に全国の博物館・美術館に対して視覚障害者・聴覚障害者への配慮水準アンケート調査を行った村上良知氏は、アンケートへの回答から「博物館スタッフは、設備の充実を前提にしつつ、人的対応を重視している。財政的に設備を充実できない代償という面がないわけではないが、柔軟できめ細かく分かり易い解説がで

きるという点で機器設備より優れていると認識されている。」^(注9)と結論づけている。

村上氏の指摘しているように、“柔軟できめ細かく分かり易い解説”に向けての取り組みは、消極的な意味のみならず積極的な意味においても、注目に値するものといえよう。

本稿では、“視覚障害者に対し解説をとおしてどのような試みができるのか”という観点から、とりわけ“対象に関して部分と全体との統合をどれだけ意識してイメージ化した解説が行えるのか”、沖縄国際大学の学生に実験的に試みた内容を紹介し、それをとおしてこれから解説のあり方を検討しようとするものである。

1. 視覚障害者の認識方法

視覚障害者が、対象に関する認識をどのように獲得していくのかについては、筑波大学の鳥山由子先生が次のように述べている。

「『一目瞭然』という言葉があるように、視覚はすばやく全体を把握することに優れた感覚です。視覚に障害があるということは、この「全体像」の把握に手間ひまがかかるということになります。

指先で一度に触れる範囲は限られますから、両手を使って手を動かしながら、部分を触り、それが全体のどこにあたるかを確認し、また部分を触るという作業を繰り返して、頭の中に全体像を作り上げていかなければなりません。」^(注10)

鳥山先生の指摘にもあるように、視覚障害者にとって触るということが彼らの認識において大変重要な役割を持っていることが分かる。そしてこの触る活動を通して、頭の中で「部分と全体」との統合がはかられ、全体像が形成されることが分かってくる。ここで述べていることは触れることができる対象を前提にしての話ですが、触れることができない場合にも、頭の中では絶えず部分と全体との統合をはかり、それをとおして確かな全体像を作り上げていく同様な作業が行われていることが推察できる。グロフとガーディナーも、その著に於いて、「視覚障害者は晴眼者と異なる方法で対象を考察する。視覚障害者は、細かな部分からスタートしてその次のところに移動するなど、対象を連続して考察している。彼らが対象を考察するときの順序は、個々の部分からなる全体像を確実なものにするため（たとえば左から右へとか、あるいは中心から周辺へというように）固定的かつ体系的なものとなっている。彼らは、詳細部分について確かめたあとに、全体像を形成するのである。」^(注11)と述べている。

2. 視覚障害者への対応：解説における部分と全体の統合一学生のレポートから

沖縄国際大学の博物館経営論の授業の中で、二つの課題を与えた。

一つは、誰でもすぐ手に入れることのできる“ビールの缶”を素材にしたスケッチとそ

れをもとにした“目をつぶってもイメージ化できる解説”の試みである。

二つ目は、一の課題実践を参考にしながら、実際に自分の選んだ博物館・美術館に出かけ、館の資料を対象にして解説を試みることであった。

① ビールの缶を素材にした解説の試み

まず一つ目の課題として与えた解説の試みについては、“目をつぶってもイメージ化できる”という以外には特別の指示を与えず、学生がどのような解説文を作るのかを見ることにした。レポートの提出者は63名。このレポートの中で、“ビールの缶が上面、側面、底面の三つからなり、これから行おうとしている解説がどの部分の解説なのかを意識し、それをとおして全体像の形成につながるような文づくりを行っているのか”を評価の視点とした。64名のうち43名（67%）が缶の全体像に触れ、その中で部分の説明を行っている。残りの20名（33%）は、いきなり細かな説明に入り、この説明が缶のどのあたりの説明なのか分からぬ状態となっている。

下記に紹介した資料2の解説を見るところにする。

この解説の良いところは、「全体的な形は円柱である」と全体の形を先に説明し、その後の大きさの説明やタブの形状についても単位を示すcmで表したりせず、手の大きさをたとえにしたような具体的なものになぞらえて説明していることである。側面についても、見る人を中心に正面と裏側に分け、正面はさらに真ん中、その上、さらに上という形で場所をはっきりさせながら説明を行っている。あとはY. エドワーズが言う解釈すなわち「ものに対する新たな見方、新たな熱意、そして新たな興味」^(注12)を生み出す方向に来館者を仕向けていくため、どこに着目させるのかという課題が残るだけである。

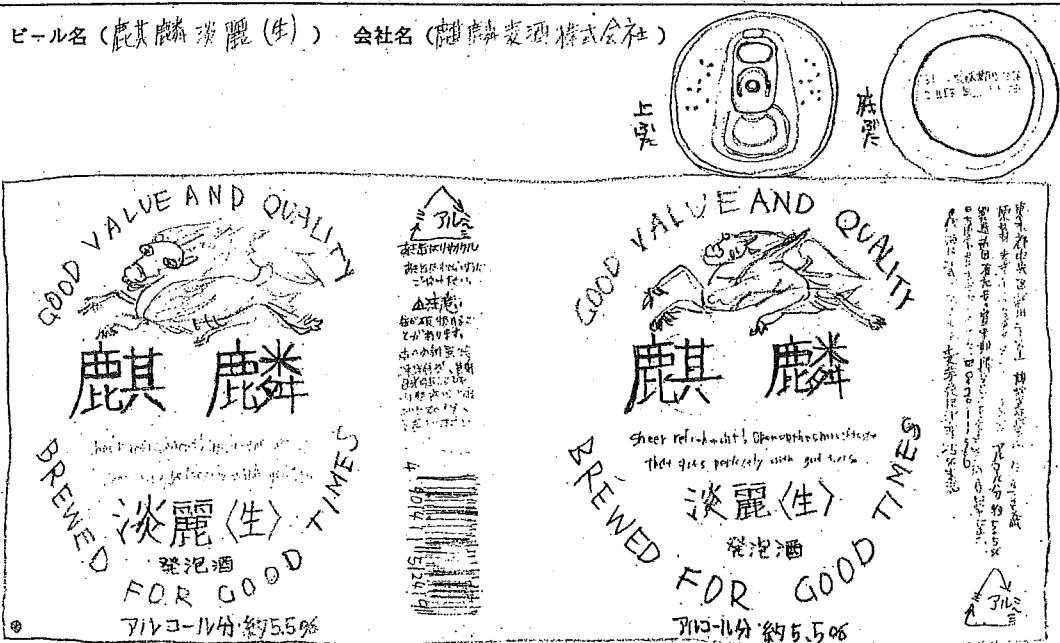
資料 1

ビール缶の質問づくり

No.1

沖縄国際大学 学籍番号() (I・II)部() 学部()年 名前()

*与えられた資料をスケッチしたあと、その資料を観察して質問をつくりましょう。(11/13の授業時に提出)



*質問が20以上にわたる場合は、用紙の裏に書いて下さい。

1	ビールの缶とビンとでは味はどちらがうのか。
2	ビールのふたのところのふつぶつは何をいみするのか。
3	ビール生のながせはいつまでもいいのか。
4	ビール缶の上部にかけてハレスリタにたどり3の1はなぜか。
5	なぜ缶の底に賞味期限が書かれてないのか。
6	ビールの原材料はなにか。
7	発泡酒とはどういう意味で普通のビールとはちがうのか。
8	瓶ビールとたてのビールとは何がちがうのか?
9	ビールにはなぜ酸化防止剤が入っているのか。
10	その炭酸の効果はいか。
11	ビールはなぜにがいのか。
12	そのにがさへいいところは何か。
13	ビールにアルコールは絶対に必要なのか。
14	ビールは空腹を満たすのか。
15	カロリーは高いのか。
16	ビールは1日にどれくらい飲んだ方が健康的にいいのか。
17	ビールはどこで生まれたのか。
18	ビールはなぜ世界中の人気者なのか。
19	ビールはどの国、地域で多く飲まれているのか。
20	国内のビール会社はなぜ少數に限られているのか。

資料 2

No. 2

沖縄国際大学(I・II)部 () 学部 () 年 学籍番号 () 名前 ()

課 题

ビールの缶について作った質問を参考にして、目をつぶってもイメージ化できる解説を試みよう。

全体的な形は、円柱である。太さは、両手で握りこみ出来るくらいで、片手でも持ちこなす。底は、平ニスボルを少しカットしたくらいのドーム状のへこみがある。上の面は、真ん中にデジタル時計の日のような形をしたタブ、つまりヒゲがあり、その両わきには、点字のようなぶつぶつが、うつづつ立っている。それと、この円柱は、まる胴とした円柱ではなく、上の面と底の面に角があり、少しくびれている。そのくびれの幅は、つめの高さくらいである。

この缶の全体の色は、黒色よりも白色である。そして、缶を自分の前に置いたとき、正面と、裏側には、同じ絵柄がある。その絵柄の内容は、真ん中に横書きの漢字で、鹿児島と大字で書かれており大きさは、大人の男性の親指をあてても少しひねりで、客くらい大きめに書かれている。その上には、架空の鹿児島の絵が書かれている。その下には、左側で車に乗って走っているか、車は、右側で走っている。さらにその上には、アーチ状に、GOOD VALUE AND QOLITYと大文字で書かれている。そして、真ん中の鹿児島の字の下には、小文字で、Sheer refinement! Open up the smooth taste that goes perfectly with good times.と二行で書かれている。また、その下には、真ん中の鹿児島の文字の大きさの1/6くらいで、淡麗(せうり)と中央に書かれ、さらにその下には、この淡麗(せうり)の1/6の大きさで、アルコールと瓶中央にある、その下には、上のアーチ状の英語とつながるかのように、逆さまのアーチ状で、BREWED FOR GOOD TIMESと大文字である。

一番下には、アルコール分 約5.5%と書かれている。

次に、この絵柄の横の側面には、一方には、会社名や原料などと書かれており、もう一方には、アルミのリサイクルマークや、バーコードがあり、注意書きは、木箱書きである。最後に、この缶はアルミづくりで、指で側面をあすと、ホコホコとへばり、強くにぎるとつぶれるようなおもしろい感触である。

おわり。

② 博物館・美術館を訪ねての解説の試み

ビールの缶を素材にした解説の試みのあと、今度は実際に博物館・美術館を訪ねて解説の文づくりを行わせることにした。そこで課題は、自分で選んだ博物館・美術館を訪ね、ガラスケースの中に入っている資料を3点選び、①スケッチをすること、そして②目の見えない人でも3点の資料についてイメージ化できるような解説を試みるということであった。レポート提出者は62名であった。ここでも解説にあたり、“部分と全体との統合が解説の中でどのように行われているのか”を評価の視点とした。62名中57名（92%）が部分と全体との関係に配慮しながら解説文づくりを行っており、前回に比べると25%の増となっている。このレポートの中から全体の形状に関する説明を以下に挙げてみる。

資料4 開元通寶の説明	日本円の10円玉よりひと回り大きいくらいの円形
資料5 離頭鈎状骨製品の説明	大きさは、一般の女性の人差し指くらいの長さの円柱で、太さはその小指ほどで細い。全体的に4等分づつで区切られており先端の方はとがっている。そして、その先端に向かって区切りごとに細くなっています。まるで4つの円錐を差し込み積み重ねたような感じである。
資料6 貝錘の説明	大きさは手のひらサイズのものから握りしめられそうなものまでいろいろある。そして貝の模様は、横に波うつようにギザギザしたものもあれば、きれいに縦ラインの入った貝もある。
資料7 荻道式土器の説明	くちの部分はとても大きくあいていて下へいくにつれて細くなっています。くちの部分はひし形の上半分形のようにとがっています。
資料8 玉元輝政作品の説明	この作品の形は典型的な壺の形はしておらず、まるでバイオリンのような形をしています。
資料9 ノロの勾玉の説明	いわゆる首にかけるネックレスで親指～小指ほどの玉が25こ小さな穴にヒモをとおしてつながっています。
資料10 南蛮瓶の説明	人が両手で抱きかかえて持つほどの大きな壺です。口の部分は全体の割には小さく、口からすぐに斜め下横に広がり、全体の1/5くらいのところでまたすぼまっています。底は口の部分よりは一回り大きいくらいです。口の回りに4つ、東西南北の位置に取つてをかざりにしたような親指の長さほどのものがついています。
資料11 銅鏡の説明	昔の古い手かがみで手の平ほどの円形の下に柄がついています。
資料12 闘牛の水墨画の説明	2頭の牛がつのとつのをからませて、まさに今闘っている最中の絵が描かれています。
資料13 裸婦デッサンの説明	一人の全裸の女性が背中を向けて両手を頭の上でクロスさせて座り込んでいる。

全体の形状については、資料8の「まるでバイオリンのような形をしています」のような具体的なものになぞらえた説明が、イメージ化しやすい。

資料 3

沖縄国際大学「博物館経営論」課題レポート（担当：沖縄県立博物館教育普及課長 前田真之 ☎ 884-2243）

課題

「博物館あるいは美術館を訪ね、ガラスケースの中に入っている資料を3点選び、①スケッチをしよう。②そして目の見えない人でも3点の資料についてイメージ化できるようそれぞれにあなたなりの解説をこころみて下さい。」

（見学の計画）

- ① 見学に行く博物館・美術館を決める。レポートには見学に行った博物館・美術館名を必ず記載すること。
名前記載のないものは、評価の対象としないので気をつけて下さい。

- ② ガラスケースの中に入っている資料のみを対象に選んで下さい。

- ③ スケッチは、線描で済いめに書いて下さい。

（レポートの提出期限）

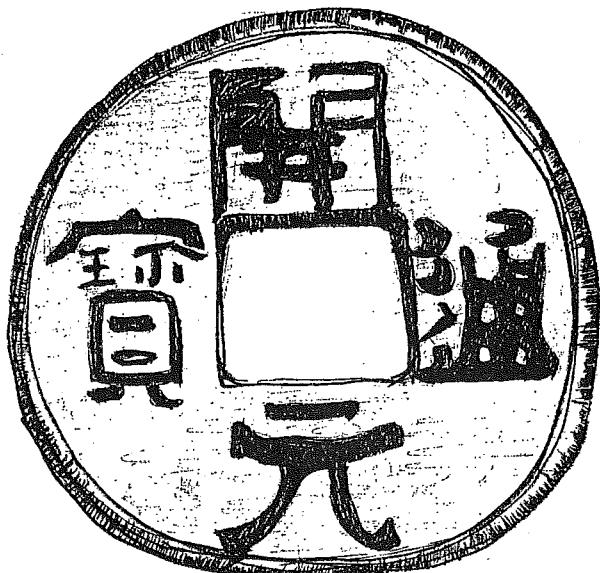
* 11月27日（土）の「博物館経営論」最終講義の日に提出すること

資料 4

沖縄国際大学(I・II)部 () 学部 () 年 学籍番号 () 名前 ()

*見学先の博物館及び美術館名 (宜野湾市立博物館)

ガラスケースの中にある資料①のスケッチ



開元通寶 621年（翁長良明氏寄贈）

目の見えない人がイメージ化できる解説を試みる

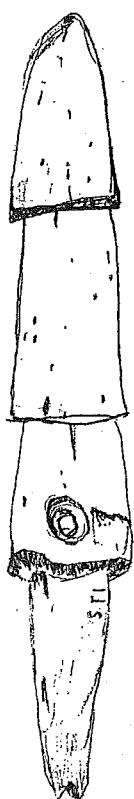
中国の唐の時代に使われていたお金らしく、西暦621年から約228年間
つくられていたものである。大きさは、日本円の10円玉よりひとまわり大きいくらいの円形で、
厚みは、10円玉と同じくらいにせえた。このお金は、1959年に沖縄島嘉手納町
の野原貝塚で発見されたもので、全体的に錆びた感じで、焦げ茶色
をしている。そして、真ん中には四角の穴がありしている。その穴の大きさは、玉を
縦に三等分、横に三等分したときの9つの部分の真ん中を取ったような大きさ
である。さらに、上下左右には、文字が彫られており、上には「開」、下には
「元」、右には「通」、左には「寶」と漢字で浮き彫りになっている。また、
千年以上のお金であるせいか、その文字はところどころ欠けている。
↑

宜野湾市立博物館

ガラスケースの中にある資料②のスケッチ

リムカリ いわはせひん
角住頭金鉛杖骨製品

(新城下原遺跡出土)



目の見えない人がイメージ化できる解説を試みる

ジエゴンの肋骨で作った金舌である。貝塚時代のBC8000～10c頃使われていた。大きさは、一般の女性の人差し指くらいの長さの円柱で、太さは、他の小指ほどで細い。全体的に4等分づつで区切られていて、先端の方はとがっている。そして、その先端に向かって匹切カリごとに細くなっており、まるで、4つの円錐を、差し込み、重ねたような感じである。（末端の方は先端ほどではないが、とかりきめてある。）この金舌の使われ方が、魚に向かって投げつけ刺すものであったから、金舌が魚から抜けないようにするために工夫された形である。また、金舌が魚に刺さると柄から離れる仕組みとなっていたらしく、4等分に分けたうちの先端からを目にまぶしくりぬかれた跡がある。その穴にひもか何かを通して、そのひもは、釣り糸のように使われていたと思われる。色は骨色（白）である。

資料 6

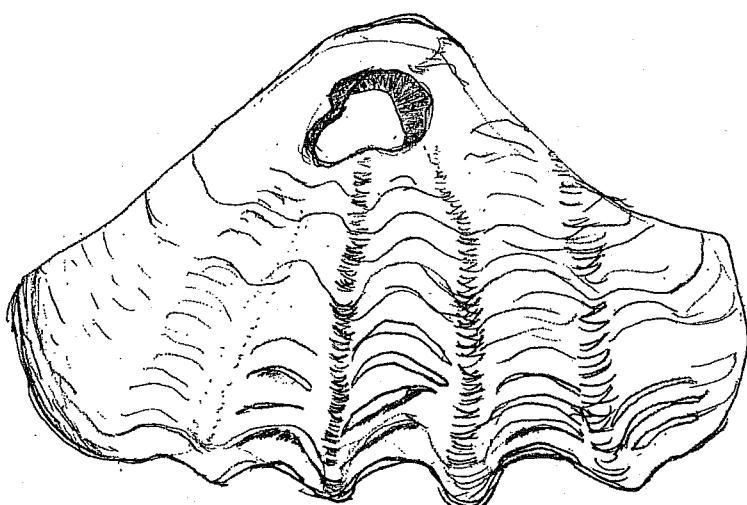
宜野湾市立博物館

ガラスケースの中にある資料③のスケッチ

かいすい

貝錘

(真志喜安座間原第1遺跡出土)



目の見えない人がイメージ化できる解説を試みる

魚をとる網にぶら下げる、おもりとして使われていた二枚貝である。大きさは手の平サイズのものから握りしめられる程度のものまでいろいろある。そして貝の模様は、横に波うつようにギザギザしたのもあれば、きれいに縦ラインの入った貝もある。今回ここにスケッチした貝は、手の平くらいの大きさで、扇形をしていて、爪の部分が波うつようにくねくねしている。そして表面に、手の指の切れた爪のようだが、爪と平行に、波うつ併列も並んでいて、その爪は爪に向かってだんだんと大きくなっている。そして、この貝は網にぶらさげられるように扇形の取手の部分の場所に穴が空いている。沖縄の浜ですぐ“つけられ”て小さなしゃこ貝に穴が空いたおもは“白い貝貝”である。

資料 7

沖縄国際大学()Ⅱ部 ()学部 ()年 学籍番号 () 名前 ()

読谷村立美術館

*見学先の博物館及び美術館名(読谷村立歴史民俗資料館)

ガラスケースの中にある資料①のスケッチ



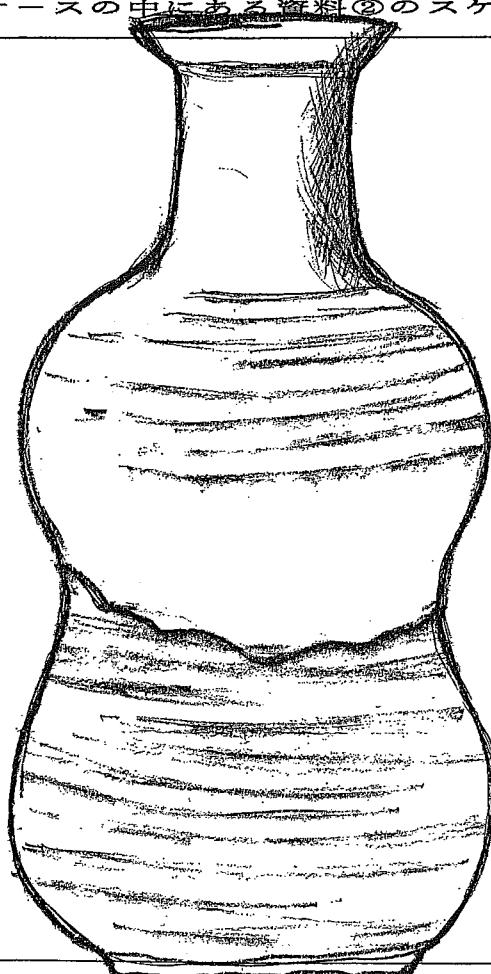
目の見えない人がイメージ化できる解説を試みる

この作品は、深鉢山形口縁土器といいます。渡具知木糸島原遺跡で発見されました。この土器は、石破片をあわめて、たりながら部分は赤土のようなものでつなぎ合わされて、復元されています。石破片は大きなものから小さなものと様々です。数的にはおよそ16破片程度です。くちの部分はとても大きくありて片程度です。くちの部分はとても大きくなっています。下へいくにつれて細くなっています。復元はできれいな形ではありません。くちの部分はひし形の上半分の形のようになります。この作品は底が安定してになりため三脚のようなものでささえられています。

資料 8

読谷村立美術館

ガラスケースの中にある資料②のスケッチ



目の見えない人がイメージ化できる解説を試みる

この作品は、玉元輝政さんの作品です。この作品の形は、典型的な壺の形をしておらず、まるで「ハイオリン」のような形をしています。くちの部分は親指を水平にのばした程度の長さです。その下には、5cmくらいの細い筒状の部分が続いています。そして、最初のふくらみが壺の半分を占めその真ん中がくびれていて、次にまたふくらみがきます。色はとてもうすい水色で、真ん中の所に白い波のようなものが下にむかって流れています。

資料 9

沖縄国際大学（I・II）部 （ ）学部 （ ）年 学籍番号（ ） 名前（ ）

*見学先の博物館及び美術館名（沖縄県立博物館）

ガラスケースの中にある資料①のスケッチ

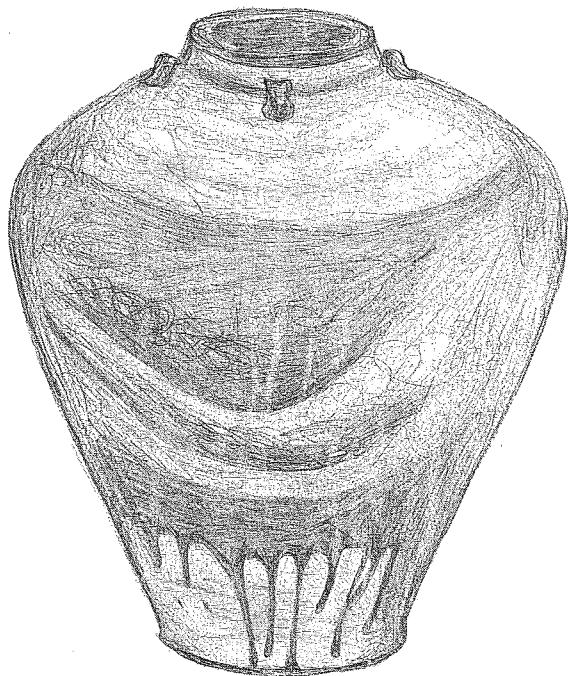


目の見えない人がイメージ化できる解説を試みる

いわゆる、首にかけマネックレスで“親指～小指型”的玉が25こ小さな穴にヒモを通してつながっています。25この中には半透明でキラキラ光っています。25この玉の中には、いたけちがう石がつけられていて、他の玉の2倍くらいの大さじ型丸ではなく、「く」の字を反対にして曲線で描いたかんじで、丸みをおびています。色は深い緑色でとてもきれいなものです。これも、みがかれたかんじで“せか”あります。

沖縄県立博物館

ガラスケースの中にある資料②のスケッチ



目の見えない人がダイメーション化できる解説を試みる

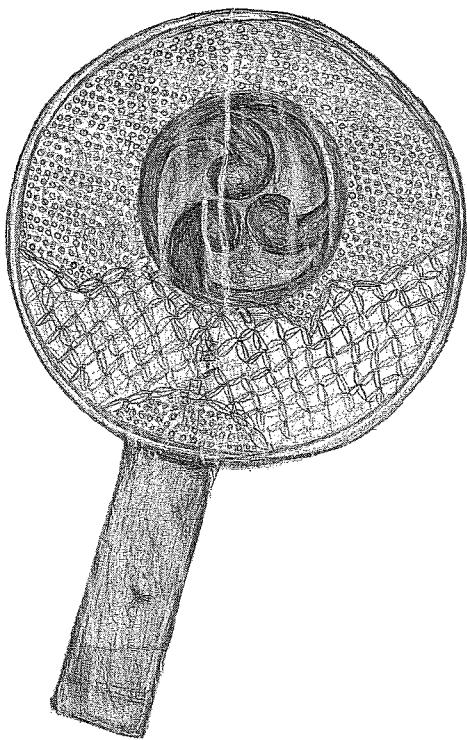
大人が両手で抱きかかえて持つほどの大
きな壺です。
ハッとした感じでとても重量感があります。
口の部分は全体の割りには小さく、口から
すぐには斜め下木賀に伝がり、全体の各
くらいいのところでまたすぼまっています。底は、
口の部分よりは一回り大きいくらいです。
口の凹りに4つ、東西南北の位置に、
取てをかせりにしたヒンナ、棘半径の長さほどの
ものがついています。色は黒にちがいこげ茶で
うわぐすりが下の部分ではたれていて
あらあらしい感じをうけます。

火葬きの具合が全体的に一定ではなく
太い横じまのようともよがり
あります。

資料 11

沖縄県立博物館

ガラスケースの中にある資料③の文ヶッチ



目の見えない人がイメージ化できる解説を試みる

昔の古い手ががけで、手の平らな円形の下に柄があり、円より少しもち短い(少し)ついています。柄の太さは2cmほどです。

緑と茶をませたかんじのいろをしています。

円の部分には文様があり、まず円のまん中に少し上の位置にまた円の本ぐらの大きさの円があり、その中には、三方からうすまき状にのびて伸びる形があります。糸会ではなく、もりあがったかんじになります。

中の小さな円の外側は不規則に上方と下方にわかれていて、上方は主よけし先くらの突起があり規則的に糸目が並んでいます。下方では、「X」の形のやうな

ものがまた規則的におて、さらに下に、さきあた突起物が重なっています。

資料 12

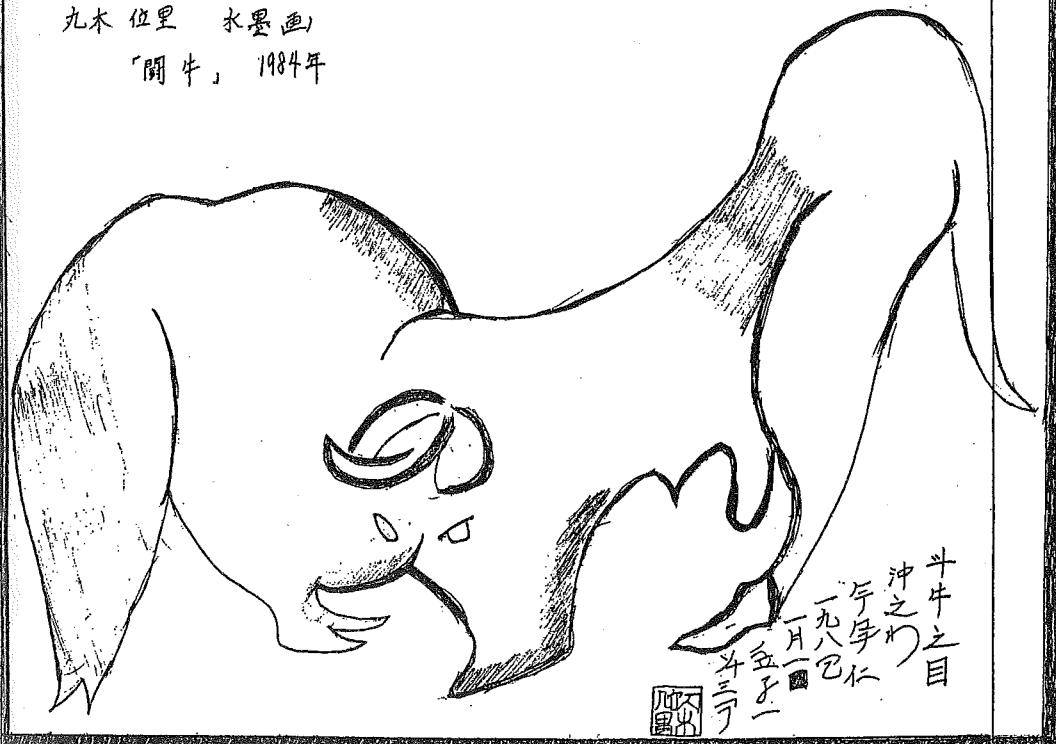
沖縄国際大学(I・II)部 () 学部 () 年 学籍番号 () 名前()

*見学先の博物館及び美術館名(佐喜眞美術館)

ガラスケースの中にある資料①のスケッチ

九木 位里 水墨画

「闘牛」 1984年



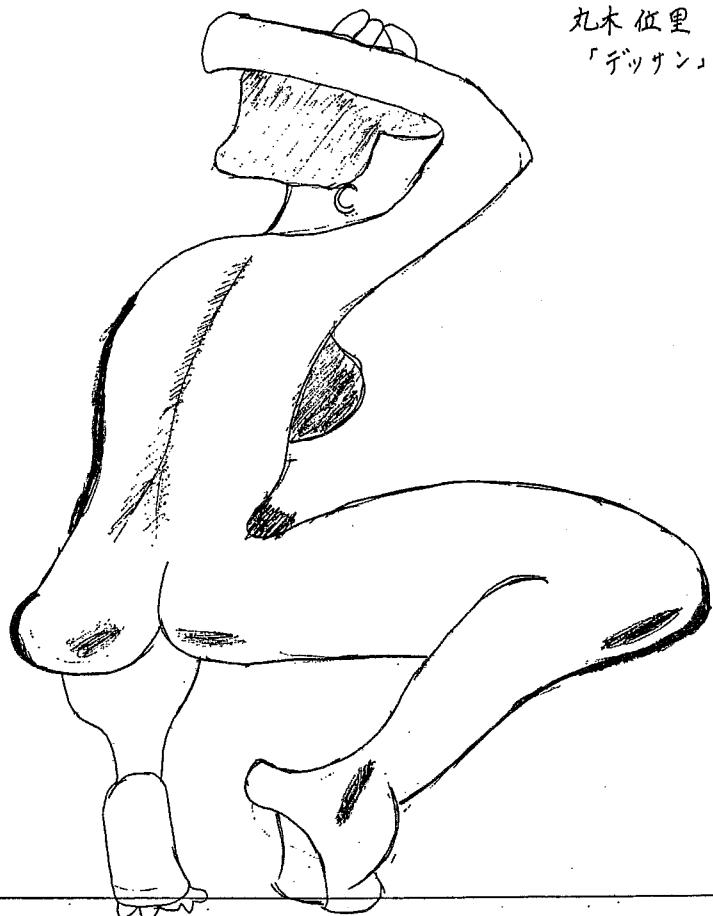
目の見えない人がイメージ化できる解説を試みる

この絵は、水墨画であり、絵の題名は「闘牛」となっている。その題名の通り、2頭の牛が一つとつのをからませて、まさに今闘りしている最中の様子が描かれている。左側の牛は目がつり上がり、体も太っていて、いかにも気性が激しそうで闘志をむき出していけるように見える。一方、右側の牛はさつき挙げた左側の牛とは違う、目もやさしくて、性質もおだやかそりな牛で、体も幾分細く、仕方なく相手の挑戦をやんわりと受けているといった印象がある。墨で描かれて、白と黒の2色だけのシンプルな絵であるが、闘牛の雰囲気がそのままじかに伝わるような絵である。

佐喜眞美術館

ガラスケースの中にある資料②のスケッチ

丸木 佐里 水墨画
「デッサン」 1986年



目の見えない人がイメージ化できる解説を試みる

一人の全裸の女性が背中を向けて両手を頭の上でクロスさせて座り込んでいる。顔は見えるか見えないか、微妙な部分を残して、手で隠されている。髪形は、取より少し上のセミロングである。両方の手と、両手をあげたままの体勢を保っているので、この絵の題名である「デッサン」の通り、この絵の女性はきっと思いをしてモデルをしていると思う。また、これも水墨画で描かれている。

3. これからの課題：部分と全体との統合をもとに、物そのものへ着目させる

ジュリア・カセムの著「光の中へ」において、エドワーズの解釈の定義が紹介されている。彼によると「‥解釈というものは、案内すること、教育すること、宣伝すること、そして人の感性を呼び起こすという、4つの要素からなり、『ものに対する新たな見方、新たな熱意、そして新たな興味』を生み出すものである」と定義している。^(注13)

この定義の中出てくる新たな見方、新たな熱意、新たな興味を、「物」そのものからどのように導きだしてくるのかが、これからの課題となってくる。

資料5の離頭鈎状骨製品の解説を行った学生は、その中で何気なく見過ごしてしまった細かな部分をよく観察して次のように述べている。「全体的に4等分ずつで区切られていて、先端の方はとがっている。そしてその先端に向かって区切りごとに細くなっておりまるで4つの円錐を差し込み、積み重ねたような感じである。この鈎の使われ方が魚に向かって、投げつけ刺すものであったから、鈎が魚から抜けないようにするために工夫された形である。また鈎が魚に刺さると柄から離れる仕組みとなっていたらしく4等分に分けたうちの先端から3区目にまるくくりぬかれた跡がある。その穴にヒモか何かを通して、そのひもは釣り糸のように使われていたと思われる。」この解説の中出てくる「4つの円錐」と「丸い穴」への着目が、何気なく見過ごしそうなものへの関心を呼び起こすきっかけにつながるのではないかろうか。

部分と全体との統合を意識し、さらに物そのものへの細かな観察をもとに、發問を工夫していくことが、視覚障害者への解説を考える上で大きなステップとなってくるのではなかろうか。

本稿作成にあたり、レポートを使用させていただきました棚原奈々枝さん、川野しづのさん、比嘉暁子さん、大川恵理さんには、心から御礼申し上げます。

[脚注]

注1 Gedra Groff with Laura Gardner, What Museum Guides Need to Know, American foundation for the Blind, at 16 (1990)

注2 Gedra Groff, 前掲書, 16p~

注3 Gedra Groff, 前掲書, 16p~

注4 Gedra Groff, 前掲書, 16p~

注5 John P. S. Salmen, Every one's Welcome : The Americans with Disability Act and Museums, Americans Association of Museums, 1998で詳しく紹介されている。

注6 前田真之「インタープリテーションとボランティアガイド」『沖縄県立博物館研究紀要』20号, 52頁以下参照。イギリスの現況については「全科協ニュース」130巻1

号、安井亮「イギリスの博物館でのバリアーフリーの現状」を参照のこと。

注7 「名古屋市美術館研究紀要」第7巻（1997年）1頁以下参照～

注8 ジュリア カセム「光の中へ：視覚障害者の美術館博物館アクセス」小学館、71頁（1998年）

注9 村上良知「視・聴覚障害者の認識支援について—全国調査における博物館スタッフの意見から」（神奈川県立生命の星・地球博物館『ユニバーサルミュージアムをめざして—視覚障害者と博物館—』）（1999年）198頁

注10 鳥山由子「触ることの意義と触るための教育」、神奈川県立生命の星地球博物館前掲書、78頁以下

注11 Gedra Groff、前掲書、31頁

注12 G. W. Shape, *Interpreting the Environment*, John Wiley and Sons, at 4 (1976)

注13 注12の前掲書を参照のこと